

令和元年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16945

研究課題名(和文) イーストケープにおける土器の類型化に関する民族考古学的研究

研究課題名(英文) Ethno-Archaeological Study on Mechanism to Generate Stylistic Similarity of Clay Pots in East Cape, Papua New Guinea

研究代表者

平原 信崇 (HIRAHARA, Nobutaka)

早稲田大学・會津八一記念博物館・その他(招聘研究員)

研究者番号：60731180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果から、イーストケープにおける土器の類型化のメカニズムは次のようにまとめることができる。土器の製作技術は母娘関係など血縁を通じて系統的に継承される。この垂直方向の技術の伝達を基盤とし、儀礼やキドコに伴う複数の製作者による集中的な共同製作を通じ、ある特定の技法は親族集団の成員を中心に伝達され、斉一性が高い土器群を生み出す母胎となる。水平方向への技法の伝達を促すもうひとつの因子が婚姻である。婚姻を契機とする製作者の移動により、ある特定の技法は概ね通婚圏に相当する空間的な拡がりを持つ。その一方で、通婚圏を超えて異系統の技術の導入をもたらす要因にもなる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、斉一性が高い土器群の生成メカニズムの解明という考古学的課題に則して、土器製作システムの技術的側面だけでなく、その背景にある親族組織や婚姻関係といった社会的要因を追究している点にある。

研究成果の概要(英文)：The mechanism to generate stylistic similarity of clay pots in East cape, Papua New Guinea, can be summarized as follows from the results of this research. Pottery-making technology is inherited systematically through mother and daughter relationship. In addition to this vertical transmission of technology, techniques are transmitted to members of the descent group through concentrated pottery-making by multiple potters attended at the feast or local trade, and that generates stylistic similarity. Marriage is another factor that encourages horizontal transmission of techniques. By the movement of potters triggered by marriage, techniques are transmitted to the extent equivalent to the marriage area, and the movement may also lead to the introduction of different technologies and techniques beyond the marriage area.

研究分野：先史考古学

キーワード：民族考古学 土器 土器づくり パプアニューギニア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

筆者は、高橋龍三郎氏(早稲田大学文学学術院教授)を研究代表者とするパプアニューギニア独立国における土器の民族考古学的研究に携わってきた。これは、縄文土器の型式が成立し変化する社会的背景を、じかに土器製作を観察できる民族誌から読み解くことを目的とするものである。主な研究フィールドはミルンバイ州イーストケープとその周辺の島嶼部である。イーストケープはニューギニア島の東端に位置し、行政的に東からケヘララ、トパと区画されている。20世紀後半には土器づくりの民族誌が記録されており(P. May & M. Tuckson 2000[1982])、今日でも主に自家消費のために土器が製作されている。

早稲田大学の調査チームによる既往の研究で明らかにされていた点は次のとおりである。(ア)器形および文様の型式学的特徴が共通する「型式」が成立している。(イ)「型式」は製作者個人の人々の身体技法レベルで共通する製作技術にもとづく。(ウ)母系制のもと製作技術は母・祖母・娘という血縁関係を基盤として継承される。(エ)妻方居住を原則とするが、土地の逼迫等の理由によって、自分自身が属す親族集団が管理する近隣の土地へ移住することも多い。つまり、「型式」が成立する基本的なメカニズムは、血縁を通じた技術の伝習と製作者の集落内外への移住であると想定されていた。しかし、とくに後者だけではその空間的な広がりのすべてを説明することが難しい点に再考の余地があった。

そこで筆者は、既往の研究成果と新たな調査データをもとに、考古学的手法による型式学的再検討を行った(図1)(平原 2016)。このねらいは、鉢形土器(以下「ギルマ」と記す)を対象に類型を設定し、その製作者たちの関係を整理することによって、斉性が高い土器群が成立するメカニズムを明らかにすることである。その結果、類型の成立背景には、血縁を通じた技術の伝習、および製作者の集落内外への移住とともに、(オ)同じ親族集団に属す製作者たちの共同製作、(カ)婚出先の製作者との技術的交流、などによる技法の共有化が重要な役割を果たしていると考えた。

こうした検討から、イーストケープにおいて、斉性が高い土器群は、血縁を通じた垂直方向の技術の伝達を基礎とし、親族集団の成員や婚姻関係者を通じてさらに技法が水平方向にも伝達されることによって成立してくると予察している。ただし、この予察はあくまでイーストケープの製作者間の社会的関係の分析から導き出されたものであり、現実にはイーストケープの製作者を取り巻く社会的ネットワークはこの範囲に限定されない(図2)。したがって、イーストケープの製作者と関わりをもつ隣接地域や島嶼部など周辺地域の人々との関係性を明らかにし、そうした社会的ネットワークがイーストケープの製作システムにどのような影響を与えているのかを考察することが必要不可欠である。

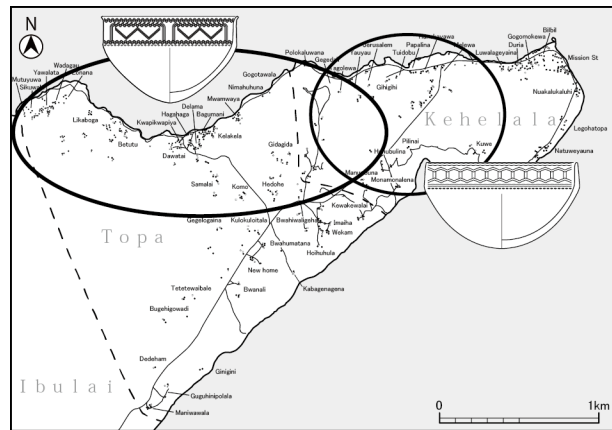


図1 イーストケープにおける類型の分布



図2 イーストケープと周辺島嶼部との関係

2. 研究の目的

本研究の目的は、土器の型式構造を考察するための基礎的研究として、パプアニューギニア独立国イーストケープの民族誌を参照し、考古学的手法による土器群の型式学的分析と、土器製作者を取り巻く社会的ネットワークの読み解きから、土器の類型化に関する民族考古学的なモデルを作成することである。研究期間内に、既往の研究でイーストケープの製作者と何らかの関わりが認められつつもその実態がいまだ不明なワリ島の製作者、イブライの製作者、ノルマンビー島の消費者の3者について、具体的には次の点を明らかにする。(1)ワリ島の製作技術の導入経路を明らかにする。(2)イブライの土器製作の実態と地域間関係を明らかにする。(3)ノルマンビー島民との地方交易(キドコ)のネットワーク基盤、である。

3. 研究の方法

計画当初はイーストケープとワリ島、イブライ、ノルマンビー島の4ヶ所でフィールドワークを実施する予定であったが、イーストケープにおける聞き取り調査によって、ワリ島とノル

マンビー島で収集を見込んでいたデータを収集することができた。このため、ワリ島とノルマンビー島でのフィールドワークに代わって、これまで情報がほとんど得られていないイブライの土器づくりと親族組織の基礎的な情報を収集することを優先し、イブライでのフィールドワークを重点的に実施した。

調査方法は、主に製作者をインフォーマントとするインタビュー形式の聞き取りと、各世帯に保管されている土器の観察と記録、そして製作実見による土器製作技術・技法の観察と記録である。聞き取る内容は、土器および土器づくり、製作者のライフヒストリー、親族組織、ファミリーツリー、移住の歴史、婚姻、転居の有無、交友関係などである。

4. 研究成果

(1) ワリ島の製作技術の導入経路

ワリ島は、イーストケープの南南東に位置し、直線距離は約 80km を測る。ミルンベイ州なかでも有数の土器生産地のひとつで、自家消費や交易を目的として土器が製作されている。ワリ島産の土器（以下「グレワ」と記載）は、大型のものでも器壁が非常に薄いことが特徴で、ミルンベイ州の広い地域で需要が高い。イーストケープも例外ではなく、ギルマと並ぶほど、数多くのグレワが搬入されている。それだけではなく、「ウォゴ・ワレ・ワレ」（現地語で「ワリ島の土器のようにつくる」という意味）と呼ばれる模倣土器も存在する。ウォゴ・ワレ・ワレの収集数は 10 点に満たず、その製作者もほんの数人を数えるに過ぎない。そのため、かつて直接的なワリ島の製作技術の導入があった可能性が想定されていたものの、両者の間の具体的な関係性については不明であった。そこで、異系統技術がどのような経路でイーストケープへと導入されたのかを明らかにするために、ウォゴ・ワレ・ワレの製作者（故人、以下「A 氏」と呼称する）の娘をインフォーマントとして聞き取り調査を実施した。

A 氏は、ケヘララのゲゲダリ出身で、ヒヒヤウラクランに属す。正確な出生年はわからないものの、当人や同世代の製作者のファミリーツリーなどから判断しておそらく 20 世紀初頭の生まれと思われる。A 氏の母と母方の祖母はともにゲゲダリ出身で、父はパヒレレ島、母方の祖父はワリ島の出身である（図 3）。A 氏自身は、イーストケープから約 20 キロメートル南東に位置するパヒレレ島出身の男性と結婚し、インフォーマントを含む九人の子どもをもった。

A 氏は、10 代のほとんどの期間をワリ島で過ごしたという。ワリ島で生活することになった直接的な理由は、母方オジにあたる男性が A 氏を連れて妻の出身地であるワリ島へ移ったからだと聞く。母方祖母と母もまた、母方祖父を通じてワリ島で生活したことがあったというが、A 氏と時を同じくしてワリ島に滞在していたかどうかはわからない。イーストケープでは、母や祖母といったごく近い血縁者から土器づくりを学ぶことが一般的である。しかし、A 氏の場合は通常土器づくりを学び始める 10 代の期間をワリ島で過ごしたため、まず母方オジの妻からワリ島の土器づくりを学んだという。そして、20 歳前後にゲゲダリへと移った後に、母からイーストケープの在地区土器の製作技術を学んだらしい。つまり、A 氏がグレワの模倣土器を製作することができた理由は、ワリ島の製作技術を有する製作者（母方オジの妻）から直に技術を学習できる環境があったからといえる。そして、その環境を生じさせた要因は、母方オジの妻や母方祖父というワリ島出身者が A 氏の姻族にいたためと考える。イーストケープ内（ケヘララ内、ケヘララ・トパ間、トパ内）の婚姻の場合、基本的には妻方居住であっても、夫の出身地へと移住したり、それぞれの出身地を行き来したりすることもある。A 氏の事例から、姻族を通じて通婚圏外といって良い島嶼部へと移住するケースもまた存在することがわかり、それがイーストケープへ異系統技術の導入をもたらす重要な因子であることが明らかになった。

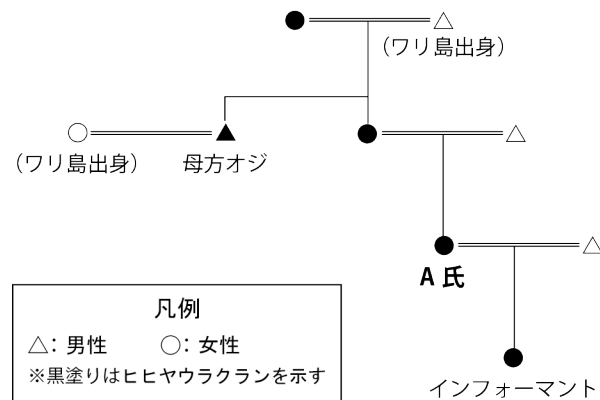


図 3 A 氏のファミリーツリー（一部抜粋）

(2) イブライの土器製作の実態と地域間関係

イブライはトパの西隣に位置する。メイとタクソン両氏の民族誌にはイブライの土器づくりに関する記載はなく（P. May & M. Tuckson 前掲）。早稲田大学の調査チームによる既往の調査でも、イブライの土器や製作者について有力な情報はほとんど得られていなかった。このため、イーストケープの隣接地ではあるものの、近年までイブライの土器づくりについては土器がつかれているのかさえも不明な状況であった。

ところが、2015 年に、筆者はトパからイブライへと移住した製作者を訪ねる機会を得、その製作者をインフォーマントとする聞き取り調査から、こんにちのイブライでも土器づくりがおこなわれていることが判明した。イーストケープとイブライは地理的に隔されているわけではなく、アロタウへ通じる道路からも海岸沿いからも徒歩で行き来できる。それにも関わらず、

イーストケープの製作者は「イブライの土器や製作者について知らない」という。これは相互に交友関係をもつトパ・ケヘララとは対照的なあり方を示している。そこで、イーストケープとイブライの地域間交流の希薄さが何に起因しているのかを調査するためフィールドワークを実施した。これまでイブライで調査を実施したことがないため、土器づくりと親族組織、婚姻などの基礎的データの収集に努めた。

調査結果は次のとおりである。第一に、イブライの製作技術・技法について、基本的な技術はイーストケープと共通するが細部の技法に違いが見られる。調査では、計3人の製作者の製作工程を実見することができ、そのとき製作された土器3点のうち2点を図4に示した(図4、以下便宜的に左の土器の製作者を「B氏」、右の土器の製作者を「C氏」と呼称する)。



製作者：B氏

製作者：C氏

図4 イブライの土器

B氏作の土器は、胴部に屈曲部を有する器形で、口縁から胴屈曲部にかけて文様が描かれている。口縁直下を櫛歯工具による波状沈線で、胴屈曲部を二枚貝による刺突列で区画し、その間に鋸歯状の主文様を描く。また、C氏作の土器は胴部にわずかに屈曲部を有し口縁にかけて開きながら立ち上がる器形で、同様に口縁から胴屈曲部にかけて文様が描かれている。口縁直下を櫛歯工具による波状沈線で、胴屈曲部を二枚貝による沈線で区画し、その間に矩形の主文様と鋸歯状の充填文様を描く。C氏作の土器は、器形こそ屈曲が弱い、筆者が拙稿でトパを中心に分布する類型として設定した土器群に酷似している(平原 前掲)。その一方で、B氏作の土器では、器形および主文様の鋸歯状文様はイーストケープでも広く見られるが、胴屈曲部の区画文様の施文技法が異なる。イーストケープにおける当該文様の施文方法は、むしろC氏作の土器と同じく二枚貝による沈線である。ここから、この施文技法はイブライに固有の技法である可能性がある。観察個体が少ないためあくまで予察の域を出ないが、少なくともイーストケープとは異なる技法とはいえるだろう。

第二に、イーストケープとイブライ間の婚姻が少ないことである。例えば、B氏をインフォーマントとする聞き取り調査で、同氏の親族の約30件の婚姻情報を聞き取ることができたが、このうち配偶者がイーストケープ出身者であるのは2割に過ぎなかった。むしろ、イブライよりさらに西に位置するワゴフフや、ヌアカタ島、バシラキ島、ウッドラク島といった島嶼部との通婚が目立つ。また、C氏の親族の場合、13件のうち5件がイーストケープ出身者との婚姻で、他はイブライ内の隣接集落やワゴフフ、パナヤティ島などである。両氏の親族の婚姻傾向は、イーストケープ内で婚姻関係をもつ傾向にあるケヘララ・トパとは対照的なあり方を示しており、イーストケープとイブライとでは、通婚圏がやや重なりつつも異なる可能性が高いことを指摘できる。なお、C氏の祖父はトパのヤワラタ出身であり、その姪が先に触れたトパを主体として分布する類型の製作者のひとりである。そのため、祖父の姪もしくは他のヤワラタの製作者を通じて、C氏へと類型情報が伝達された可能性は十分に考えられるだろう。

以上から、イーストケープとイブライ間の地域間交流の希薄さは、両地域間の通婚の少なさと相関しており、それは両者の通婚圏の差異に起因していると考えられる。B氏作の土器に見られる固有の技法と、トパの類型と共通するC氏作の土器の存在から、イブライはおそらくイーストケープの通婚圏とそれ以西の地域の通婚圏とのちょうど境界に位置している可能性が高い。

(3) ノルマンビー島民との地方交易(キドコ)のネットワーク基盤

ノルマンビー島は、イーストケープの北東、ダントルカスター諸島の最南端に位置し、イーストケープから最寄りの南海岸まで直線距離で約16kmを測る。イーストケープの人々とノルマンビー島民の間では、今ではほとんど見ることはできないが、古くからキドコという地方交易がおこなわれていた。交換される物品は、主にイーストケープの土器とノルマンビー島の食料であり、ヤムイモなどバスケット1杯分の食料に対して土器1個のレートであったと聞き取っている。イーストケープの人々は焼畑によって主にバナナやタロイモ、ヤムイモなどの日々の食料を得ているが、儀礼に伴う共食のように大量の食料が必要になるときや、日常生活においても食料が不足するときにキドコを開催していたという。キドコ開催時には、同じ親族組織の成員を中心に複数の製作者が共同で交換用の土器を製作することもあったという。こうした複数の製作者による集中的な共同製作により、製作者間に技法の伝達と共有化が促され、斉一性が高い土器群を生み出す母胎となる。

これまで、イーストケープの様々な製作者からキドコがおこなわれていた事実を聞き取ってはいたが、それが具体的にどのようなネットワークを通じて成り立っているのかについては不明であった。また、ファミリーツリーや婚姻関係の調査から、イーストケープにはノルマンビー島からの移入者や婚入者が少なからず存在することがわかっていたが、これらも断片的な情報にとどまっていた。そこで、こうした移入者や婚入者の情報を整理するとともに、主にイーストケープの製作者をインフォーマントとして、あらためてファミリーツリーとクランの移住の歴史について聞き取り調査を実施した。

調査の結果、イーストケープには9つのクランが存在するが、このうち7つのクランにノル

マンビー島からの移住者の子孫が存在することを確認した。例えば、イーストケープで最も製作者数が多いバグマニクランでは、4つのサブクランのうちハナウリ・タウディ・ワヤクに属する人々がノルマンビー島ブナマからの移民の系譜に連なるといふ。また、ケヘララで最も製作者数が多いヒヒヤウラクランには、ロナナ・メレワ・ゴゴモケワ・ゲゲダリとそこから分岐したサブクランが存在するが、ロナナを除くサブクランの人々はすべてノルマンビー島からの移民の系譜に連なるといふ。メレワとゴゴモケワに属する人々はノルマンビー島中央部のドタウナからの移民の系譜に連なり、ゲゲダリとそこから分岐したサブクランに属する人々はノルマンビー島南海岸に位置するクラダからの移民の系譜に連なるといふ。他にもガルボイクランのダワタイに属する人々もゲゲダリと同じくクラダから、ヘヘゴクランのビルビルに属する人々はブシアイアイからの移民の系譜に連なる。これらのうち、ダワタイとビルビルについては、ノルマンビー島にも同じ名前の村が存在するという聞き取り内容からも、両者の強い関係性が推察される。

以上のように、こんにちのイーストケープの住民の出自を辿ると、なかには内陸部からの移住者の子孫も存在するが、その多くはノルマンビー島からの移住者の系譜に連なることが明らかになった。すなわち、両者の多くは共通の祖先をもつ親族集団の構成員という関係にある。ここから、キドコは親族集団のネットワークを基盤に成立している交易システムと考える。

以上の成果と既往の研究成果の総合的な考察から、イーストケープにおける土器の類型化のメカニズムは次のようにまとめることができる。土器の製作技術は母娘関係など血縁を通じて系統的に継承される。この垂直方向の技術の伝達を基盤とし、儀礼やキドコに伴う複数の製作者による集中的な共同製作を通じ、ある特定の技法は親族集団の成員を中心に伝達され、斉一性が高い土器群を生み出す母胎となる。水平方向への技法の伝達を促すもうひとつの因子が婚姻である。婚姻を契機とする製作者の移動により、ある特定の技法は概ね通婚圏に相当する空間的な拡がりをもつ。その一方で、通婚圏を超えて異系統の技術の導入をもたらす要因にもなる。

<引用文献>

May, Patricia., & Margaret Tuckson. 2000 [1982]. *The Traditional Pottery of Papua New Guinea* (2000ed.). Honolulu: University of Hawai'i Press

平原信崇 2016「ギルマの類型化に関する一考察」『古代』第138号、177-205頁

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

高橋 龍三郎、根岸 洋、平原 信崇、佐藤 亮太、パプアニューギニアにおける民族考古学的研究(15)、史観、査読有、第178冊、2018、87-107

高橋 龍三郎、大網 信良、平原 信崇、山崎 太郎、パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(14)、史観、査読有、第176冊、2017、77-102

〔学会発表〕(計3件)

平原 信崇、イーストケープにおける土器製作技法の伝達、一般社団法人日本考古学協会第83回研究発表会、2017

Hirahara Nobutaka, Feasting and Concentrated Pottery Production in East Cape, Papua New Guinea, Society for American Archaeology 2017 Vancouver, 2017

Hirahara Nobutaka, Pottery-making and social Interaction in East Cape, Papua New Guinea, World Archaeological Congress 8 Kyoto, 2016

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。